山岡荘八

徳川家康

5

うず潮の巻

講談社文庫

定価480円

徳川家康（とくがわいえやす） 5 うず潮の巻

山岡荘八（やまおかそうはち）

昭和49年2月15日第1刷発行
昭和58年2月20日第34刷発行

発行者　三木 章

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03）945 1111（大代表）
振替　東京 8-3930

デザイン　亀倉雄策・菊地信義

製　　版　豊国印刷株式会社

印　　刷　共同印刷株式会社

製　　本　株式会社国宝社

© Wakako Fujino 1974

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131205-7 (3)

講談社文庫

徳川家康 5 うずの潮巻

山岡荘八

講談社

目次

天下布武　七
不如帰　二五
真昼の梟　六六
濡れ青葉　八五
男対男　一〇四
見えざる糸　一三四
甲斐の風　一五三
人生岐路　一七五
三方ヶ原　一九六
底を貫く　二三三
謀略の中　二四二
運命星座　二八二
悲劇の麦　三一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

女の戦い　三三七
暗雲うごく　三五七
油　蟬　三七七
嵐気のみだれ　三九六
叛　心　四一五
破　滅　四三五
浅井氏・朝倉氏・武田氏系譜　四六二
姉川の合戦参考図　四六三

挿絵　木下二介

徳川家康

5 うす潮の巻

天下布武

一

うららかな春の日が縁から庭へあふれていた。時々鶯の声が近づいては遠ざかり、遠ざかっては近づいた。

信長はめずらしく衣服を正して居間にいた。伊勢路の各寺社におくる安堵状に、自分の手で「天下布武」の大印判を押している。

その手許をのぞき込むようにして、そのかみの猿、いまの木下秀吉が人を喰った表情でニコニコしていた。

信長もすでに以前の信長ではなく、近畿から伊勢一円を平げて、その印判の文字が示すように「天下布武」を宣言するほど大きくなっていたが、秀吉もまた以前の藤吉郎ではなかった。度々の合戦に先手の大将をつとめ、今、浜田で一万石を領するまでにのしあがっていた。

「どうだ家康は元気であったか」

信長が話しかけると、秀吉は何を思い出したのか、

「へへへへ」と笑った。

「妙な奴だ。何かおかしい」
「御大将が二十二、三のころに考えたことを、三河どのも考えているようて」
「おれが二十二、三のころの、とは何のことだ」
「子孫繁昌の施策でござりまする」
「アノハソハノハ、側女さがしか、そう言えば家康は幾つになった」
「二十九歳てござりましょう。御大将より八ツ年下でござりまするゆえ」
「そうか。二十九てはちと遅いな」
信長はまたしばらく黙って判を押していたか、
「そちはどうだ、まだ出来ぬか」
と、思い出したように訊ねた。
「はい、こればかりは、戦えば風の発する如く、攻むれば河の決する如しとは参りませぬ」
「なぜ参らぬのかわかるまい。この信長をたばかった罰たと思い知れ」
「いいえ、御大将をたばかったなととはもってのほか、女房ともも方々へ願掛けいたして居りますれば、いすれそのうち」
秀吉は信長が警戒していたとおり、いつの間にか足軽頭藤井又右衛門の娘のお八重を手なずけ、ひとい工面をやってのけて妻にしている。
信長はその時のことを思うと、いかにも猿らしい才覚と、いまたにおかしさがこみあげた。直接又右衛門に申込んだのでは不承知と計算して、仲のよい前田又左衛門利家に、
「――お八重をわしの側女にくれ」

と、申込ませたのである。

藤井又右衛門はびっくりしたり喜んだりした。相手は名家の御曹司、その上、新しく信長が決めた七田町赤母衣をゆるされた一方の大将なのである。

「――前田さま、それはご冗談てはござりますまいな」

「――わしが冗談を言うと思うか」

「――しかと承知いたしました。八重は必ず私が説き伏せまする。しかと……」

そう言って引受けて来たのたか、しかし藤吉郎とすでに密約のあるお八重が承知するはすはなかった。

「――前田さまには賢いことで聞えたお松の方さまかおられまする。こればかりは、はっきりとお断り下され」

又右衛門は青くなった。青くなるのを見すまして、利家からは、いよいよ返事をせまってくる。そうなると、相談するのは、以前の配下て、その頃の台所奉行、木下藤吉郎の猿をおいて他になかった。

二

藤井又右衛門に相談されると猿は、御台所の囲炉裏のふちて、いかにも神妙に腕を組んで考えこんだそうな。

「――貴公と前田さまとは特別の仲ゆえ、何とか詫ひてくれまいか。八重は死んでも嫌だと申しているが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「――はてさて合点のいかぬ。これこそ玉の輿と思うが、いや、恥しいのであろう。いまいちど説いてご覧なされ」

又右衛門はそう言われると悄然として、またお八重のもとへ帰っていった。か、いぜんとして返事はおなじであった。

その間に藤吉郎はまた利家のもとへ行って、

「――いま一押し頼む」と、やって来たらしい。こんとはお八重を説いているところへ、

「――前田又左の面目が立たぬ。刀にかけても貰い受くる」

という使がとんでいった。

又右衛門はその使を帰して律義に「切腹」まで考えたらしい。

すると、そこへのこのこと猿は訪ねていって、

「――どうだ。行く気になったであろう」

と、やってのける。みな打合せてのからくりゆえ、真正直な又右衛門に太刀打出来るはずはなかった。

「――仕方がない。前田さまかカンカンになってござるゆえ、皺腹切って詫びようと思う」

「――なに切腹……それは一大事だ。ては、こうしなされ。実は娘にはすでに言い交した相手があった。それゆえご勘弁願いたいと」

「――それは駄目じゃ。嘘はとおらぬ。前田さまはいっこく者ゆえ」

「――と言うがほかに断りようはあるまい。よしノ、その相手は誰だと聞かれたら、それは拙者だというがよい。そうすれば、拙者かあとは掛合うてみせてやる」

「――なに、相手かおぬしじゃと？　向うで本気にするものか」
「――するもしないも、いうてみるより手はあるまいが」
そういわれて又右衛門は利家をたすねていった。むろん利家は伝しまい。伝しないときにはどうなるものかと案してゆくと、
「――そうか。言い交した者があったのか。それではやむを得ぬ。が、念のためにその者の名を聞こう」
「――はい。それが木下藤吉郎でござりまする」
「――なに、猿じゃと。嘘ではないな」
「――は……はい。この父もあまりのことに……」
又右衛門が言いかけると、
「――よし！　この又左も武士、そう聞いては後へはひけぬ。わしかお八重と猿の仲人をしよう。異存はあるまい」
万事は猿が書きあげた筋書どおり。又右衛門は自分の意見などさしはさむ余地もなくて、すごすごと戻って来た。
又右衛門にとっては一難去って又一難。前田又左さえ嫌ったお八重が何で猿を婿にしよう……そう思いながらも成行を話してゆくと、お八重は二つ返事で、猿のもとへならば嫁ごうと言ったそうな。
「――戦の才覚もよくするが、女にもまたやっぱり油断の出来ぬ奴であった」
信長はあとでそれを聞かされて腹をかかえて笑いくずれたものだった。

「猿！」
「はい」
「そちと家康との話の間、人払いはいたしてあったろうな」
信長は印判をつき終って秀吉に向き直った。

三

「もちろん人払いはいたしましたか……」
秀吉はそこであたりを見回して、「老臣たちの中には、こんとの上京は朝倉討伐と」
「気づいている者があったか」
「はい。大半はまず」
「では尚更よくふれさせねばならぬ。何か手を打って来たか」
「はい。浜松から岡崎の道すじへ行商人二十三人、噂をまかせてござりまする」
「何と言わせた」
「今年の京の春は賑わおうぞ、二条御所の焼けあとへ、将軍さまの大きなお館が出来上り、御所の工事もどんとんすすんている。三河守さまも京まで花見においでなそうなと、ふれさせました」
「花見とはまたのとかになれたな」
「はい。それを民百姓か信じるほと、三河から伊勢、尾張、美濃、近江と、みな太平の光を仰ぎかけて居りまする。まことに天下布武のめてたいきざしにござりまする」

信長はそれを聞くと眉根を寄せて、
「追従は申すな。その方らしくない」
と、叱っておいて、
「しかし、京へ花見に参れるようになるのも遠くはあるまい。いや早くそうせねばならぬのだが」
と、言い足してため息した。
信長が天下布武の印判を作らせたのは、足利義昭か征夷大将軍に任ぜられた後、自分で伊勢へ転戦し、伊勢の国司北畠具教のあとは自分の第二子、茶筅丸（信雄）に、神戸家のあとは第三子の三七丸（信孝）に嗣がせる約束で平定し、山田の大神宮に参拝した時からだった。
京の皇居の衰微も言語に絶していたか、大神宮もまたひとく荒れはてていた。
民族のよるべき大根を荒廃にまかせたままで、いかに刀槍をもてあそんでも決して乱世は正されない――そう気づいてからこの印判とともに皇居の造宮にとりかかった。
それも民の疲弊を思うて急ぐことなく、二、三年はかかるつもりで、島田弥右衛門と朝山日乗を奉行として工事をすすめている。
事実その頃の朝廷のありさまは想像以上のものであった。
皇居の築地は崩れてなく、ところどころ竹垣やいばらなどを結いつけて、その中に正親町天皇と皇太子誠仁親王とは、皇女二人、女官五人という十人たらずで住まわせられていた。
天皇にはこの他にまだ二人の皇女があらせられたが、それはお手許のご都合からそれぞれ寺院に入れられ、崩れた垣から時々町家の子供たちが中にまぎれ込んでゆくと、どこもかしこも切れ

かかったみすが下っているだけで、森閑として人影はなかったそうな。
信長の勤皇心は父信秀以来の伝統もあったが、それ以上にこの衰微の現実と結びついて強くなった。
（このようなことがあってよいものではない）
民族の宗家の衰微は、歴史のとの頁を開いてみてもそのまま民の衰微につながっていた。
（まず大根を正して！）
その信長の志がわかっているだけに、信長のもらしたため息はひしひしと秀吉の胸を打った。

四

「さし当って花見の邪魔は越前おろし、その方へも手は打ってあろうな」
「はい。こんどの入京は名物の茶器あつめ、よい品持参のものには金に糸目をつけぬぞと京中へふれさせました」
「そうか茶器あつめか」
と信長は苦笑した。
足利義昭は、信長の助力によって征夷大将軍になると、直ちに彼を副将軍に推挙した。
しかし信長は固辞してこれを受けなかった。
信長が副将軍になると越前の朝倉義景がおさまる筈はないからたった。義景もまた流浪中の義昭を何彼と助けて後日をねらった一人であり、斯波氏の守護代として家柄は信長よりも上であっ

た。
「ばかなお人でござりまするな。時勢が見えませぬ」
「義景か」
「はい、御大将が副将軍を御辞退なさった気持を考えたら、素直に上洛なさればよいものを」
秀吉が薄笑いをうかへてそう言うと、信長は眉をしかめて舌打した。
「その方には義景の肚が読めぬな。あやつ、この信長と将軍とては近いうちに必ず衝突すると見て、わざと上京しないのだ」
「そのことでござりまする。衝突すれば将軍は義景を頼って越前にゆくに違いない。その時に将軍を擁して一戦せんとそれか時勢の見えぬ証拠でござりまする」
信長はじろりと秀吉を見やって、「猿、庭を歩こう」と立ち上った。
信長が見透している以上に、秀吉もまた義景の肚は見ぬいているらしい。
庭へ出ると信長はまっすぐに築山の上のあずまやに入っていった。そこからはひろく城内が見通せて人の近づくおそれはなく、ふくらんだ桜の蕾にゆらゆらと春の日が当っていた。
「家康の上京は間違いないの」
「たしかに」
「武田もよい。伊勢も片づいた……」
信長はひとり言のように指をくりなから、
「猿、朝倉征伐で、いちばん大切なのは、そち、何と思うぞ」
「はい。北陸に攻め入っている最中に、もし万一にも浅井どの……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong